

2017年度 須磨学園高等学校 入学試験問題

国語 出題の意図

全体について

2017年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、「世界と自分」「社会と自分」「他者と自分」「自分と自分（自分とは何者なのか）」との関わりをテーマに据え、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、高等学校の学習活動を行うための「知識」「読解力」「表現力」といった基礎学力をどれだけバランス良く兼備しているかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年同様、4問構成とし、「小問集合」「評論」「小説」「古文」の配列とし、100点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について

□ 『国語便覧』を主な素材として、基本的な知識を網羅的に問うた。1つの設問で、なるべく多くの知識が確認できるよう、出題に工夫を凝らした。普段からどれだけ国語に興味をもって取り組んでいるかという受験生の学習姿勢が間接的に表れるのではないかと考える。

問一 兵庫県のゆかりのある作家と、その代表作品との組み合わせを答える問題。文学史における知識の正確さを確認している。

問二 慣用句に関する幅広い知識を確認する問題。間接的には受験生の語彙力も問うた。

問三 四字熟語に関する知識と、知識の活用力を問うた。四字熟語の意味を単純に問うのではなく、意味を踏まえつつ、適切な例文を選ばせることによって、本当にその意味を理解できているのかを確認することができるのではないかと考える。

問四 ことわざに関する幅広い知識を確認する問題。3つの空欄から導かれるキーワードを答えさせるという設問の工夫を施し、受験生の洞察力を確認している。

問五 敬語の知識と応用力を確認する問題。敬語を単に知識として知っている以上に、実際の現場として活用できるかどうかを確認したい意図で出題した。

問六 国文法における係り受けの理解を問うた。高等学校での古文学習につながる重要な視点が定着しているかどうかを確認している。

問七 熟語の成り立ちを問うた問題。高等学校での漢文学習につながる基礎的な知識や考え方が定着しているかどうかを確認している。

□ 利己的で、かつ多様な人間たちが営む社会において、望ましい人間の振る舞いについて述べられた文章である。高等学校という新しい社会生活を営む上で、人間がそもそもどのような存在であり、望ましい社会生活を送るためにはどうすれば良いのかを考えるきっかけとしてもらいたいと考え、出題した。読解問題はすべて択一式ではあるが、問題を通して、受験生の記述力を測ることができるような作問を心がけた。

出典 平尾透『エゴイストの共存』

問一 漢字の書き取り問題。断片的な知識の確認とならないよう、文脈が反映された箇所を問うことで、間接的な読解力も併せて問うている。解答欄を分割することで、細かく学力を検出できるよう配慮した。

問二 文脈を踏まえ、空欄に入る適切な接続語を選ぶ問題。受験生の論理的思考を確認している。

問三 作品冒頭の、社会生活を営む上で要求される人間の基本的性格に関わる本文理解を確認している。あえて指示語に限定して傍線部を引くことで設問要求を明確にし、主題理解を深めつつ、論旨展開に受験者を招き入れるための導入問題でもあった。

問四 社会生活と「ホンネ」と「タテマエ」の関わりについて、空欄に入る適切な語を確認しながら、受験生の本文中盤までの流れを整理し、後の段落につなげるための問題である。

問五 人間の社会性と、社会的秩序の維持との結びつきを確認する問題。傍線部の主語が何を指すのかを明らかにした上で、傍線部の帰結判断に至る根拠としてふさわしい該当箇所を確定するために、論理的に文章を読み解く高い読解力を要求している。さらに選択肢をあえて類似した内容とすることで、記述問題に対する志向性も間接的に確認している。

問六 一般的には非難されがちな偽善が評価される判断根拠について、筆者の理解を確認する問題。本問題は、傍線部の帰結判断が複数ある場合の理由説明の解答方針について、本校国語科の考えを示したものである。この設問も問五同様、正答は、記述問題の模範解答として耐えうる強度のものを目指した。

問七 結論部の内容理解を確認する問題。最終段落における本文内容の要点を把握し、傍線部の設問要求に従って、適切に思考できる力を問うた。

☐ 祖母と二人で暮らす「私」が、兄の紹介で突然訪れた異性に恋をする話である。話形としては古典的だが、筆者は昭和初期に脚光を浴びた女性作家として、当時隆盛を極めたプロレタリア文学とは対照的な、その瑞々しい文体が特徴的な作家であり、文体の面白みに着目した問題に加え、人物像の理解や心情把握など、小説の基本的理解を問う素材文として適切だと判断し、出題した。

出典 尾崎翠「歩行」

問一 語彙に関する正確な理解を確認した。間接的には、日頃から国語辞書を引く学習姿勢が身についているかどうかを試している。

問二 「私」の「幸田当八」に対する認識を通して、人物像や人間関係についての理解を整理し、作品世界に円滑に引き入れるための導入問題である。設問に付帯条件を加えることで、該当箇所をより意識しやすいよう配慮した。

問三 「私」の仕草から「幸田当八」への想いを読み取る問題。文章の表面的な理解ではなく、その表現に込められた「私」の心情まで適切に理解できているかどうかを確認している。

問四 比喩理解を問うた問題。「私」と「おたまじゃくし」に、どういう関連性があるのか、本文内容から適切に推測できるかどうかを確認している。比喩に関わる正確な理解を確認するため、あえて紛らわしい選択肢も設けた。

問五 文脈を踏まえつつ、空欄にあてはまる適切な語を選ぶ問題。一見すれば何気ないように思える箇所ではあるものの、この箇所にも「幸田当八」の滞在を惜しむ「私」の気持ちが実によく表れており、普段の小説学習から、こうした文体表現に意識的になってほしいという意図から作問した。

問六 作品終盤の展開と結末に置かれた詩との関連性について問うている。「土田九作」の、小さい動物を見ない方が良いというアドバイスを踏まえ、歌うことができない「私」の状況を象徴的に表した詩的表現を選ぶ。設問に付帯条件を加え、取り組みやすさを考慮した。

四 江戸時代の「笑い」をテーマとした作品であり、二人の登場人物の簡単なやりとりを踏まえつつ、どこに面白みがあるのかを考えさせるような作問を心がけた。古典作品といえども、描かれている内容は現代人にも共感できるものであり、古文を読む上での単語力や文法力はさておき、古典作品の面白さを受験生に紹介したい意味合いもあって、この素材文を出題した。

出典 『醒睡笑』

問一 例年出題している現代仮名遣いに改める問題である。基礎力を確認している。

問二 文脈を踏まえつつ、主語を判定する問題。主語が変わる場合、変わらない場合、客体が主体に変わる場合の原理原則を直感的に理解しているかどうか、さらに間接的には人物関係を理解できているかどうかも問うている。

問三 前後の文脈を踏まえ、傍線部の適切な意味を選ぶ問題。傍線部の後に「世におちぶれて」と対比させて考えることで正答が得られるため、対比的思考の有無を確認できる問題だと考える。

問四 指示内容を適切に理解できているかどうかを確認する問題。紛らわしい選択肢を加えることで、現代語の語彙力も間接的に試している。

問五 「仁物らしき男」が鯛を差し出した理由について、その行為に至るまでの二人のやりとりに加え、そのような行為をした「仁物らしき男」の心情を適切に理解しているかどうかを確認している。漠然とした内容の選択肢もあるため、文章の要点を確実に押さえることができたかどうかを確認できる問題ではないかと考える。

問六 話の主題である「面白さ」の理解を試す問題。登場人物たちのやりとりに関する理解と関わらせながら、結末の「心ざす先祖の頼朝の日なり」を適切に理解できているかどうかを確認している。